

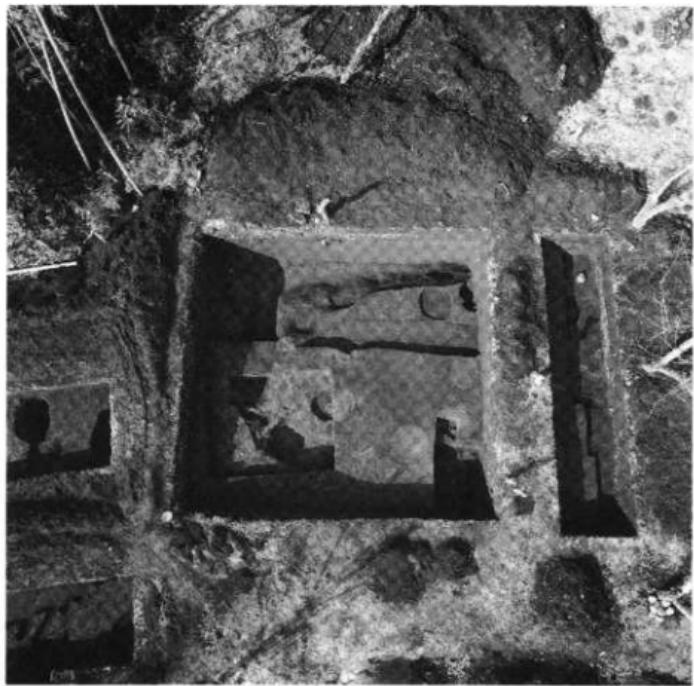
西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第25集

市内遺跡発掘調査概要報告書Ⅱ

日向国分寺跡

1997・3

宮崎県・西都市教育委員会



I 地点C区 第3-2トレンチ造構検出状況

序

西都市教育委員会では、国庫補助を受けて、日向国分寺の伽藍配置確認に伴う市内遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査結果の概要報告であります。

今回の調査では、北側のトレンチから回廊の外側に巡らされていたと推定される溝状遺構の北辺が確認されましたが、昨年度の調査では南辺と東辺が確認されており、このことによつて、東側半分ではあるものの、ある程度主要伽藍配置を確定することができました。

また、溝状遺構の南東隅にあたるトレンチからは、昨年同様ピット（柱穴）が溝状遺構に並行する形で検出されており、回廊のものであることが再確認されました。

これら遺構等は、日向国分寺跡解明のためには極めて重要なものであり、大きな成果をあげることができました。

本報告が、専門の研究だけでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を得るための資料となれば幸いと存じます。

なお、調査にあたってご指導・ご協力いただいた調査指導員の先生方、宮崎県教育庁文化課をはじめ、発掘調査にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成9年3月31日

西都市教育委員会

教育長 平野 平

例　　言

1. 本書は、西都市教育委員会が国庫補助を受けて、平成8年度実施した市内遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
3. 調査及び図面作成等については糸方が行った。
4. 本書の執筆は、第Ⅰ章～第Ⅳ章を糸方が、第Ⅴ章を日高正晴が行った。
5. 本書に使用した方位は磁北である。
6. 調査で出土した遺物は、西都市歴史民俗資料館において保管している。

目　　次

第Ⅰ章. 序説

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の体制	1

第Ⅱ章. 遺跡の位置と歴史的環境	2
------------------------	---

第Ⅲ章. 調査の概要	4
------------------	---

第Ⅳ章. 遺構と遺物	9
------------------	---

第Ⅴ章. まとめ	13
----------------	----

第一章. 序 説

1. 調査に至る経緯

日向国分寺跡は、昭和23年に日向考古調査団、昭和36年・平成元年度に県教育委員会にて確認調査が実施されているが、僧房跡（平成元年度）と推定される遺構以外、その主要伽藍配置については明確にされておらず、さらに、当時の報告書の周辺写真と現在では寺域内外の宅地化は著しく、畠地や空き地の確保も困難であることから、伽藍配置の確認が急務であった。このようなことから、市教育委員会により平成7年度から国庫補助を受けて主要伽藍配置等の確認調査を実施することとなった。

なお、調査は区画整理事業等に伴う遺跡所在確認も実施する予定であったが、区画整理事業の実施が延期されたこと、また、調査員の途中退職による事業規模の縮小などから、日向国分寺跡にしほって実施することとなった。

2. 調査の体制

調査主体 西都市教育委員会

教 育 長 平 野 平

社会教育課長 佐々木 美 德

同 文化財主事 鹿 崎 修 一

調査員 社会教育課係長 斎 方 政 幾

同 主事補 岩 田 陽 子

補助調査員 同 主 事 日 高 慶 一

調査指導員 日 高 正 晴 (西都原古墳研究所長)

柳 沢 一 男 (宮崎大学教育学部助教授)

第Ⅱ章. 遺跡の位置と歴史的環境

西都市街地の西方には標高50~80mの通称西都原と呼ばれる台地がある。台地上には柄鏡式を含む前方後円墳30墳・方墳1基・円墳278基の大小古墳で構成された特別史跡・西都原古墳群が所在し、また、南九州独特の埋葬形態を有する地下式墳も12基確認されている。

この西都原台地は、九州山地から南南東に向かって岬様に細長く延びた洪積世台地で、その南端には產土神の三宅神社が創建している。

その神社地域から急坂を下ると、上尾筋・下尾筋遺跡の所在する標高30m程の中間台地になり、さらに下ると標高12m程の沖積平野部へとつながっている。

日向国分寺跡は、その中間台地の北方、北・東側は断崖、西側は西都原台地、南側は谷地形に挟まれた地域に位置している。そして、北方600m程の妻高等学校敷地には同尼寺跡も保存されており、本地域は歴史的にも価値の高い、重要な地域となっている。

また、国分両寺は、国府の近くに置かれるのが全国的な通例であったが、現在国府の推定地となっている地域を平成元年度に県及び市教育委員会で試掘調査を行ったが、わずかの布目瓦のみしか検出できなかった。よって、結果的には、弥生時代を中心とした集落跡が確認されており、そして、前方後円墳5基を含む古墳20基（特別史跡・西都原古墳群）も所在していることから、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡地帯として位置づけられる。

この日向国府については、現推定地（上尾筋地区）の他、右松地区及び寺崎・法元地区など幾つかの候補地があげられているが、昭和63年度から実施されている県教育委員会による国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査及び範囲確認調査や市教育委員会による遺跡所在確認調査によって、多量の布目瓦に加え回廊跡と推定される遺構や掘立柱建物跡などが寺崎・法元地区より検出されており、本地域が日向国府の有力な候補地として浮上してきた。

さらに、昭和63年度の平田・童子丸新道路建設に伴う酒元遺跡発掘調査においては、古墳時代中期中葉から後葉、つまり、男狭穗塚・女狭穗塚が築造された時期頃の集落跡が検出されており、西都原台地上はもちろん、日向国分両寺跡を含む中間台地は、古代日向国の中心的な役割を果たしてきた、歴史的な環境を持つ地域であったということができる。



- | | | |
|------------|-------------------|-----------|
| 1. 西都原古墳群 | 2. 御陵墓（男狭穗塚・女狭穗塚） | 3. 丸山遺跡 |
| 4. 新立遺跡 | 5. 寺原第1遺跡 | 6. 原口第2遺跡 |
| 8. 日向國分尼寺跡 | 9. 酒元遺跡 | 10. 寺崎遺跡 |
| 11. 松本遺跡 | | |

第1図 遺跡位置図

第Ⅲ章. 調査の概要

日向国分寺跡については、昭和23年に駒井和愛を団長とする日向考古調査団が、また、昭和36年及び平成元年度には県教育委員会が確認調査を実施している。昭和23年の調査地点については、資料不足で明示できないが、昭和36年については、旧堂宇いわゆる五智堂及びその南側を中心に、平成元年度については寺域の北側にあたる部分（中央東西道路の北側）の確認調査が実施されている。

昭和23年及び昭和36年の調査では、伽藍配置などについては明確にされていないが、平成元年度の調査では僧房跡と想定される掘立柱建物跡などが検出された。

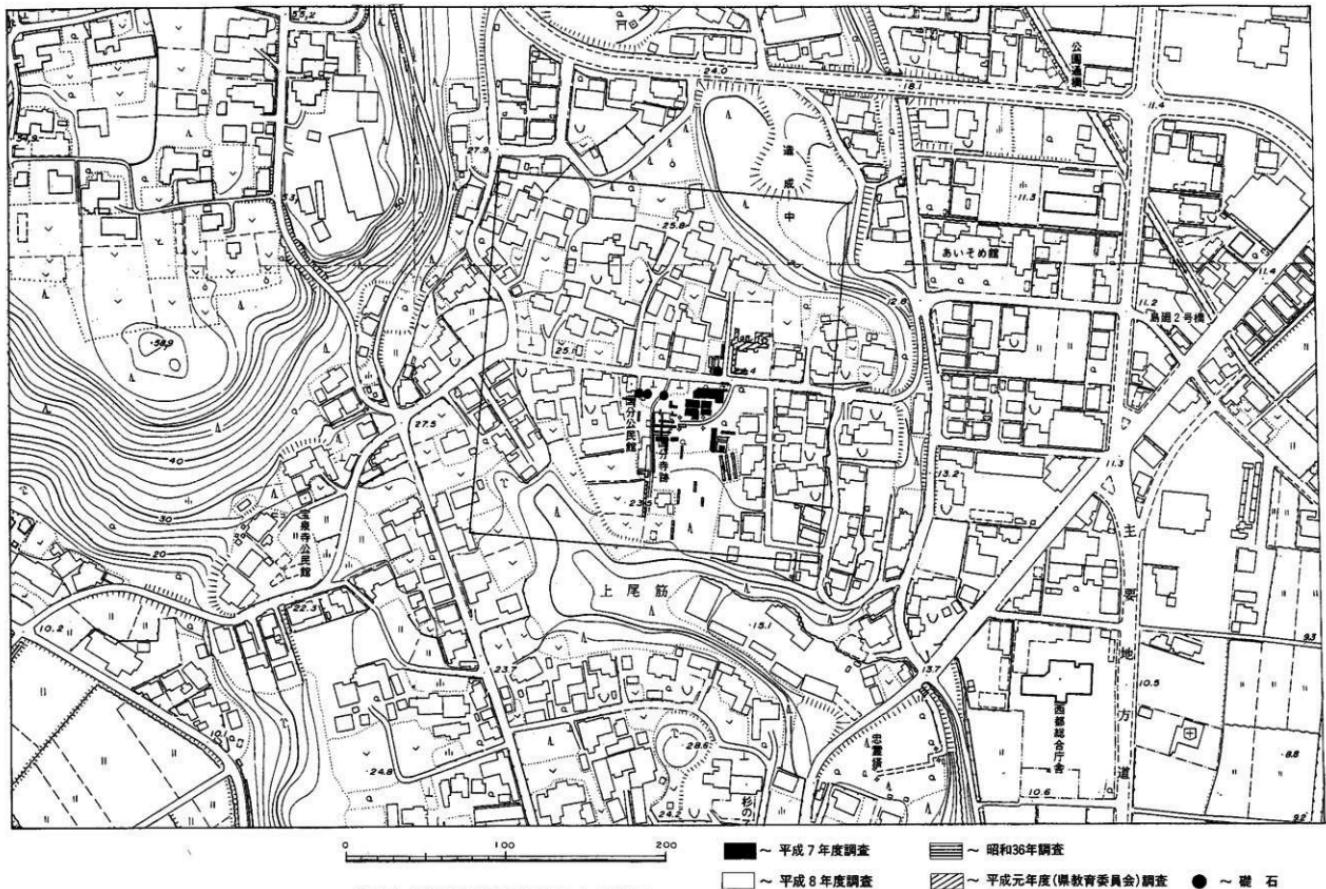
この日向国分寺跡の調査は、昨年度から実施しているが、昨年の調査では金堂のものと推定される掘込地業跡や回廊跡（並行したピット列）、さらに、その回廊の外側に巡らされていたと推定される溝状造構が検出された。これらは、いずれも主要伽藍配置に関する造構で、今まで明確でなかった主要伽藍配置の一部分が特定できた。

本年度はこの調査結果を踏まえ、昨年度検出した造構の確定及び溝状造構の範囲を確認するための調査（トレンチ調査）を実施した。

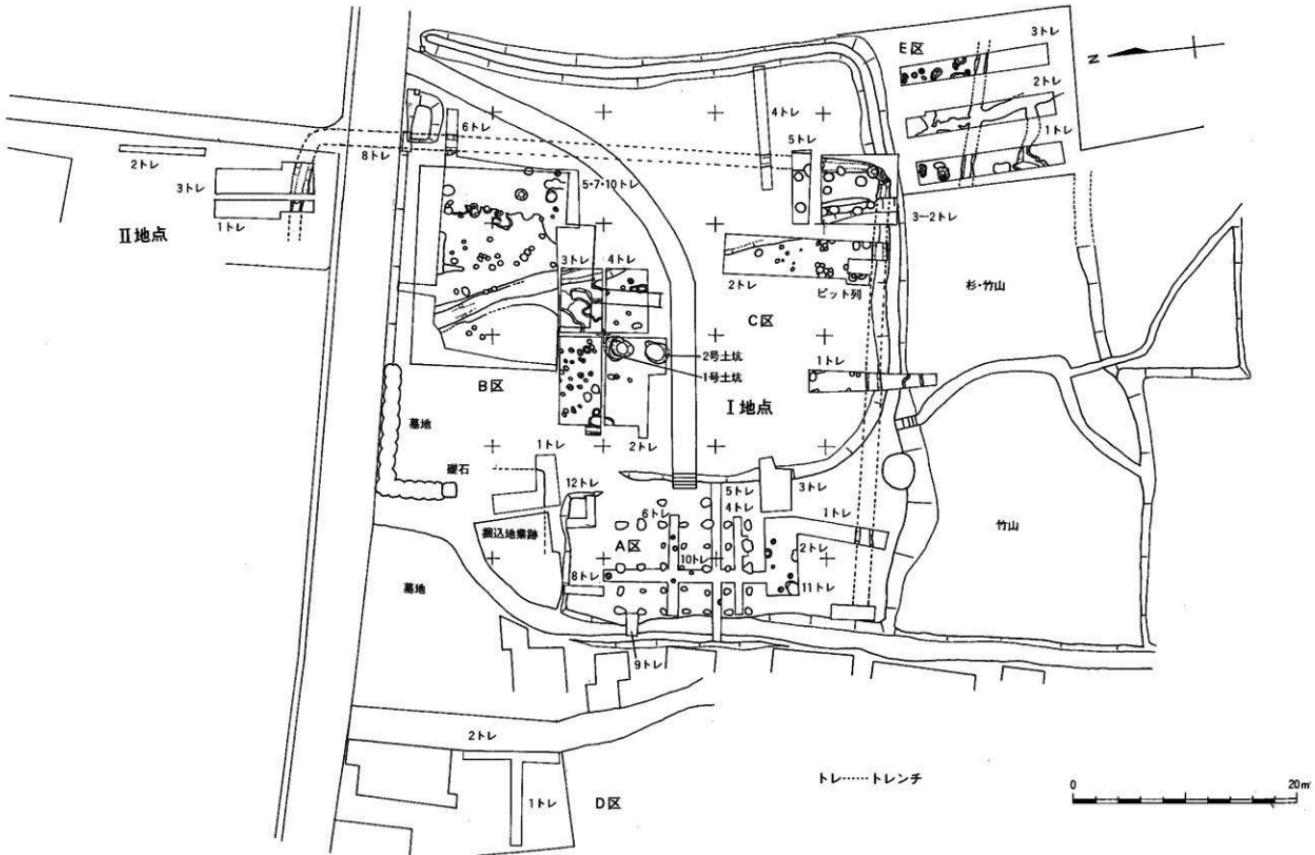
調査区設定については、昨年度調査した地域をⅠ地点（A～D区）として、第Ⅰ地点の南側に隣接した調査地をⅠ地点E区（第1～3トレンチ）、Ⅰ地点北側の道路を隔てた調査地をⅡ地点（第1～3トレンチ）とした。

調査の結果、Ⅰ地点C区の第3-2トレンチから直行した溝状造構とそれに並行したピット列、さらに、北側の道路を隔てたⅡ地点第1・3トレンチから東西に延びた溝状造構が検出された。ピットは、溝に平行してほぼ等間隔に並んでおり回廊のものであること、また、Ⅱ地点第1・3トレンチの溝状造構は、他トレンチ同様回廊の外側に巡らされていたものと推定され、このことによって、溝状造構の東辺が確定されるなど大きな成果をあげることができた。

なお、Ⅰ地点E区については、後世のものと推定される溝とわずかのピットのみで、主要伽藍配置に関連した造構はほとんど検出されなかつた。



第2図 日向国分寺跡周辺及びトレンチ設定図



第3図

第IV章. 遺構と遺物

1. 遺構

《溝状遺構》

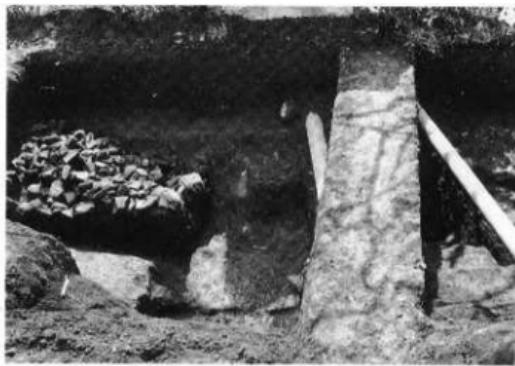
溝状遺構については、昨年度の調査で、A区の南側第11トレンチ、C区の南側第1~3トレンチ・東側第4トレンチ、B区の東側第5・8トレンチから検出され、これを線で結ぶとA区第11トレンチからC区第3トレンチまで直線的に延び、そこから直角的に曲がりB区第8トレンチまで延びていることになる。これは南辺と東辺にあたる部分で、本年度は、北辺を確認するためのトレンチを昨年度調査地の北側畠地（II地点）に3本（第1~3トレンチ）設定して行った。

結果、防空壕などにより一部分削り取られていたものの、第1・3トレンチから東西に延びた幅0.95~1.60m・深さ0.10~0.43mの溝状遺構を確認することができた。

この結果、東辺が確定されたことになり、東辺は復元すると長さ53.4mになる。その他、北辺は現存4.40m・南辺は現存約40m、幅0.9~1.5m・深さ0.10~2.80mを計る。

E区からは東西及び南北に延びた溝状遺構が検出された。幅0.90~1.20m・深さ0.23~0.3mを計る。時代的なことは遺物等がまったく出土しておらず不明であるが、検出状況など

から主要伽藍配置とは関係ない、後世のものであると推定される。



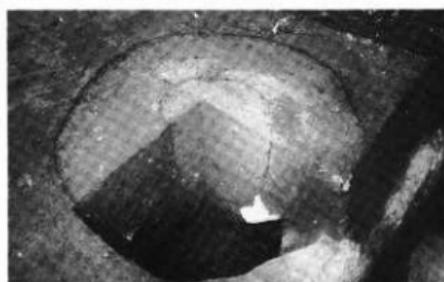
溝状遺構検出状況
(II地点第3トレンチ)

《ピット及びピット群》

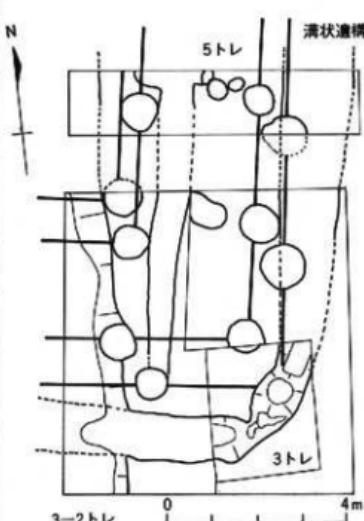
ピットは、各トレンチより検出されているが、このなかで注目されるのはC区第3~2トレンチから検出されたピット群で、昨年同様溝状遺構に並行して検出されており、回廊のものであることが再確認された。桁間2.90~3.20m・行間2.90~3.25mで、ピット径0.65~1.0mを計るが、なかには柱痕跡が認められるものもあり、柱痕跡径0.25~0.30mを計る。また、溝

状遺構内にも並行したピットが確認され、少なくとも2回は建て直しが行われたものと考察される。このほか、E地点第1トレンチからは幅0.65m・深さ約1.30mのかなり深いピットが検出された。このピットについては、大きさ及び深さなどから考察するとかなり高いものが立てられていた可能性があり、轆轤支柱ではないのかとの指摘も受けていることから、注目される。

註1. 奈良国立文化財研究所 山中敏史氏のご教示による。



ピット群等検出状況（I地点C 3-2トレンチ）



第4図
I地点C 3-2・5トレンチ遺構実測図

《配石遺構》

D区第1トレンチから長方形プランの配石遺構が検出された。長軸1.55m・短軸現存0.90mで、検出面からの深さ0.09~0.14mを計るもので、ほぼ全面に扁平な自然石が配されている。

遺物は、横位の粗縄目及び縦位の精縄目の平瓦の他土器壊の底部小片が出土している。

使用目的及び時期については、現在のところ不明である。



配石遺構検出状況（I地点E 1トレンチ）

2. 遺物

遺物は軒丸瓦・軒平瓦や平瓦・丸瓦などの瓦をはじめ土師器・須恵器・陶磁器・石器が出土している。総数では、約700点になるが、もっとも多いのが瓦で全体の70%以上を占めている。

瓦は、そのほとんどが平瓦と丸瓦で、わずかに混在して軒丸瓦と軒平瓦が出土している。

軒丸瓦はわずか3点のみで、単弁のものと複弁のものがある。1は北辺の溝状遺構（Ⅱ地点第3トレンチ）から出土したもので、外区外縁から内区にかけての破片である。複弁の蓮華文が2葉遺存している。

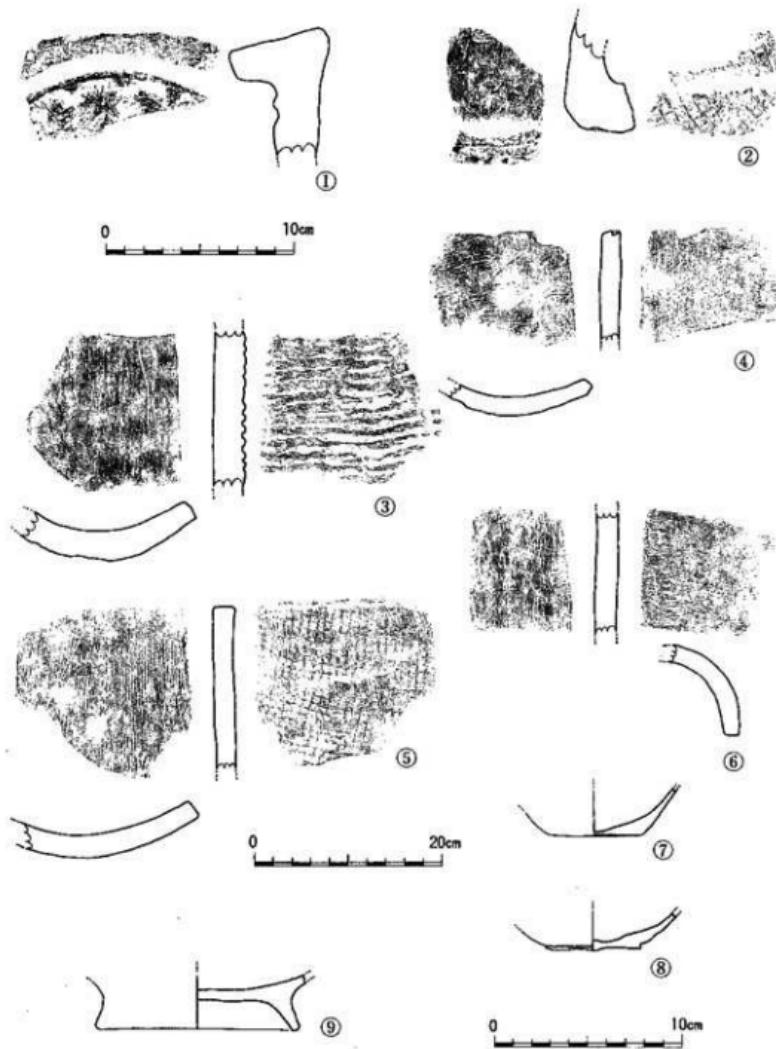
軒平瓦も量的には少なく、わずか1点のみである。2は北辺の溝状遺構内から出土したもので、界線は確認されるものの、内区のほとんどが剥落しており、文様の判断が困難であるが、唐草文と推定される。凸面は正格子目叩きで、瓦当部にも施されている。凹面はナデ調整である。

平瓦及び丸瓦には中近世のものが多く含まれているが、凸面の叩きと凹面の調整などによつていくつかに分類される。大きく凸面の叩きは格子目叩き、繩目叩き・平行叩に分けられる。さらに、細分すると、格子目叩きは正格子目叩き・長方形格子目叩き・斜格子目叩きに、繩目叩きが横位のものと縦位のものに分かれれる。その他、叩き板によるナデ調整のものなども含まれているが、圧倒的に繩目叩きのものが多い。繩目叩きのものには、粗繩目叩きと精繩目叩きのものがあるが、縦位のものはわりに精繩目叩きのものが多く、丁寧な仕上がりになっている。3は横位の粗繩目叩きの平瓦で、凹面に布目痕を残す。4は縦位の精繩目叩きの平瓦で、凹面に布目痕を残す。5は正格子目叩きの平瓦で、凹面に布目痕を残す。6は横位の粗繩目叩きの丸瓦で、凹面は叩き板によるナデ調整が施され、わずかに布目痕を残す。

土師器は溝状遺構などから壺・高台付碗等が出土している。底部はヘラ切り底のものがほとんどである。壺は平底に直線的に開く体部がつくタイプのもの（7）や底部に段を有するもの（8）などが含まれている。高台付碗は脚の短いタイプのものが多く、垂直及び外方向（9）に開いている。

須恵器は、量的にもわずかで、しかも小片であることから判断しにくいが、壺や甕などの破片と思われる。

陶磁器は、昨年の調査の際出土した青磁・白磁などの輸入陶磁器は確認されず、陶器・染付・插鉢などが出土した。



第5図 出土遺物実測図 (①・⑦~⑨→1/3・②~⑥→1/6)

第V章　まとめ

日高正晴

昨年度行われた日向国分寺跡伽藍配置の確認調査においては、回廊跡と推定される溝状造構および掘立柱穴などが検出されたので、本年度も、引き続いてその回廊遺構を解明するため、さらに、その範囲を拡大して発掘調査が進められた。

調査結果は、まず、南辺の溝状造構の東南隅、第3トレンチの部分において、溝状造構が、北方に直角状に屈曲していることが確認できたが、さらに、その東辺にあたる直線状の溝状造構は、東西道路を越し、第Ⅱ地点において、西方に屈曲していることも検証することができた。

ところで、筆者らも参加した昭和23年の日向考古調査団および同36年の県教育委員会などによる日向国分寺跡の発掘調査において、日向国分寺跡の中軸線として、A区の直ぐ西側を、南北に通じている小径⁽¹⁾を確認しているので、そのように考察すると、このたびの発掘調査においては、回廊跡の中軸線から東側半分の寺域のうち、南辺の直線の長さは約40㍍、そして、東辺の長さも53.4㍍を計ることができた。

それで、回廊跡の東辺と南辺を確認し得たとすれば、北辺の中軸線までの長さも、恐らく、南辺の長さと同一の距離になり、そして、この回廊跡の全域は、中軸線から東の方に、南辺と東辺によって閉まれた寺域と同じ範囲だけ、中軸線から西の方に拡がることになるので、おうよそ、回廊造構の北辺および南辺の長さは、80数㍍前後にはなると考えられる。

それでは、次に、回廊遺構として掘立柱穴の外側につくられている溝状造構であるが、その役割としては、雨落ち溝としての遺構と思われる。しかし、雨落ち用に掘り込まれたとすると、今までのところ、内側には、全く溝状造構などは確認されていないので、納得がいかない。それとも、雨水が集中的に、回廊の外側に流れるような屋根組の構造になっていたのかもしれない。

さて、それでは、日向国分寺跡の伽藍配置は、寺域の中心部に、中軸線に沿って回廊がつくられ、その北側中央部には、金堂が建てられていたようであり、そして、その北部には講堂が建立されていたと思われる。そうすると、現在、小径として残存している中軸線に沿って、南門、そして回廊の南辺中央部に中門が建っていたと推測されるが、平成元年の県教育委員会の発掘調査においては、この金堂推定地の東北部に5間に2間の長方形建物が確認されたので、あるいは、僧坊跡の可能性もあると思われる。

このような見地からすると、日向国分寺跡の伽藍配置は、回廊の中軸線に沿って、南の方から直線状に、南門、中門、金堂、講堂として建立されていたと推定される。それで、そのような観点からみると、日向国分寺跡の寺域は、2町4方と推測するのが妥当と考えられる。そして、そのことを裏付けるように、その寺域の東限および西限地域からも布目瓦がかなり出土している。

注

- (1) 宮崎県教育委員会『日向国分寺跡』日向遺跡縦会調査 報告第3号, 1963年3月
- (2) 宮崎県教育委員会『国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査報告書』Ⅲ 1991年3月



【地点B】区画よりトレンチ通路検出状況



【地点C】区画よりトレンチ通路検出状況



【発見位置】トレンチゲート附近状況



【地点E】区画よりトレンチ通路検出状況

このよう見解をもつと、自転車分布の化粧配便は、両輪の中輪轍に沿って、奥の方から前輻耗に、前輪、中輪、後輪、調査をして現在を踏まいたる結果を得る。それで、そのような観点からみると、初期段階の考察は、この考え方を認識するのが正直と思われる。そして、そのことを実験的のように、その後の進展および既設施設からも布自其が歩行者用としている。

遺図

- (1) 青森県教育委員会「自転車分布調査及歩道路複合調査」報告書(3月) 1962年3月
- (2) 青森県教育委員会「自転車、歩道、古事記等道路評議分布調査報告書」第1回 1951年3月



I 地点C区第3-2 トレンチ遺構検出状況



I 地点C区第5 トレンチ遺構検出状況

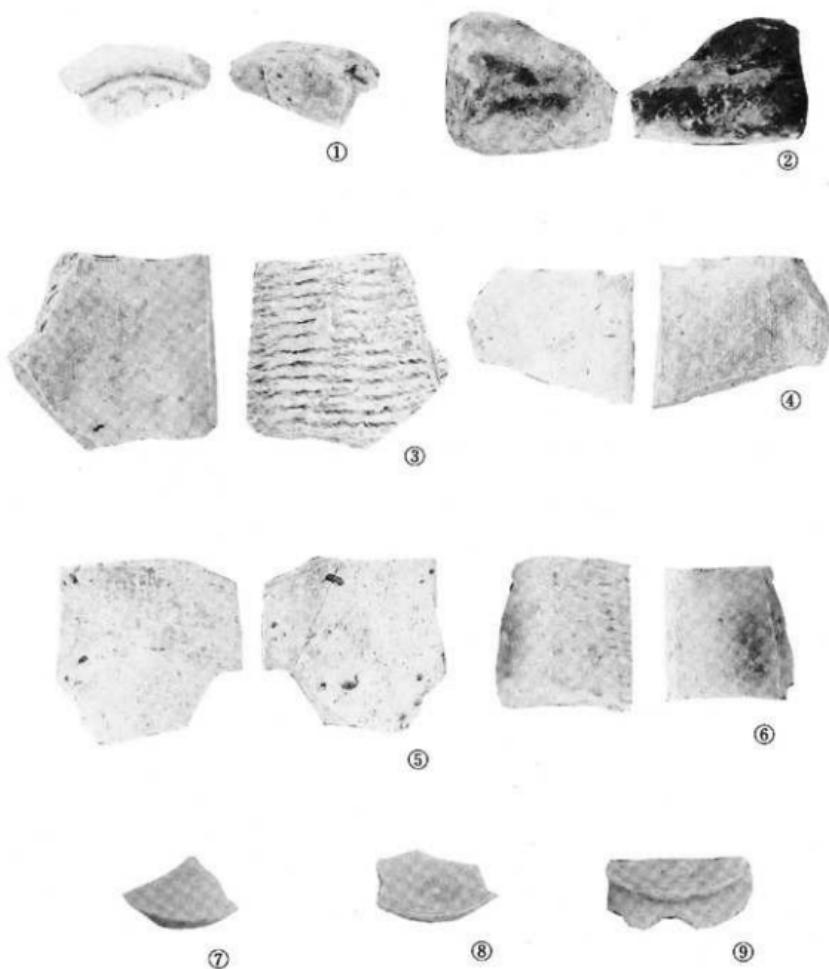


I 地点E区第1 トレンチビット検出状況



I 地点E区第2 トレンチ遺構検出状況

図版2



報告書抄録

ふりがな	ひむかにくんじよ							
書名	日向国分寺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第25集							
編著者名	糸方政幾							
編集機関	西都市教育委員会							
所在地	〒881 宮崎県西都市豊陵町2丁目1番地 TEL 0983-43-1111							
発行年月日	西暦 1997年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺構					
さいとばるらいくいき 宮崎県西都市 おおやまち わたぐま 大字三宅字国分	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおやまち わたぐま 大字三宅字国分	1008	32度 5分 50秒	131度 23分 55秒	19950726~ 19951019		450	遺跡所在確認 調査に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
日向国分寺跡	国分寺	奈良~平安	推定回廊跡 土坑 溝状遺構	1基 3条	軒丸瓦・軒平瓦 丸瓦・平瓦 土師器杯 土師器高台付椀 須恵器 陶磁器			主要伽藍配置の一部 を確認

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第25集

日向国分寺跡

平成9年3月31日発行

編集発行 西都市教育委員会

印刷所 なかむら印刷所

